

書名：天地明察

著者：沖方丁

出版社：角川書店

出版年月：2009年11月

総ページ数：475ページ

ISBN：9784048740135



推薦者

芝山明義

鳴門教育大学大学院准教授
教職実践力高度化コース

～暦と上を向いて歩く生き方～

2012年、日本では上半期だけでも932年振りの「金環日食」（5月21日）、8年振りにして21世紀最後の「金星の太陽面通過」（6月6日）、そして「金星食」（8月14日）、と天体ショーの続いた「天体ゴールデンイヤー」だった（いずれも日本時間）。また、ここに紹介する図書を原作として製作された日本映画が9月に全国公開され、好評を博した。

本書は、人々が日常使っている暦の改訂をめぐる、数学（算術）と科学（天文学、測量術など）、そして政治・経済、地理・歴史から哲学・宗教までが関わる有様を背景に、江戸時代初期に23年の歳月を費やして改暦を成し遂げた主人公の半生を描いた、史実をもとにしたフィクション（小説）である。

「つまるところ暦とは、絶対的な必需品であると同時に、それ以上のものとして、毎年決まった季節に、人々の間に広まる“何か”なのであろう。／それはまず単純に言って、娯楽だった。（中略）／さらにそれは教養でもあった。信仰の結晶でもあった。吉凶の列挙であり、様々な日取りの選択基準だった。それは万人の生活を映す鏡であり、尺度であり、天体の運行という巨大な事象がもたらしてくれる“昨日が今日へ、今日が明日へ、ずっと続いてゆく”という、人間にとってなくてはならない確信の賜物^{たまもの}だった。／そしてそれゆえに、頒暦は発行する者にとっての権威だった。（中略）／もしかすると暦とは、一つに、人々が世の権威の所在を知るすべなのかもしれない。」（194頁）

このように暦は人々の暮らしのよりどころ、為政者の統治の象徴としての意味をもってきた。それだけに、その改訂は大事業であり、一種の革命でもあった。主人公である安井算哲こと渋川春海は失敗しても挫折しかけても、ひたむきに観測し計算して自然の摂理を追究し、時には策略もめぐらして、改暦を成就させたあきらめない人であった。

春海が妻となるえんに放ったという「士気凛然、勇氣百倍」（409頁と413頁）の八字が、その心意気を伝えている。地上では何かと不安や問題を抱えて俯きがちの日々を過ごすことの多いこの頃、夜空を見上げて変わることなく「ほぼ」北を示す北極星を確かめつつ来し方行く末に思いを馳せれば、ともすればブレがちな心もちにも一本、筋を通せるかもしれない。

なお、本書は2010年本屋大賞の他、第31回吉川英治文学新人賞、第7回北東文芸賞、第4回船橋聖一文学賞、2011年大学読書人大賞を受賞している。また、加筆修正されて文庫化（角川文庫、2分冊、2012年5月、解説：養老孟司）されている。

